

普門寺からのお便り

ドイツ 普門寺 中川 正壽老師

《二月九日》

お変わりなく御健勝のことと存じます。

過日は泉岳寺様にて皆様方と久しぶりに顔を合わせる事が出来まして、亡き方丈様に感謝いたしました。小坂老師には若輩未熟者の私ごときにもいつも誠心をもって接していただき、深く感謝しております。

さて、三月末にお伺いさせていただくつもりでございましたが、旅行そのものを取りやめることになりました。お詫び方々ご報告いたします。

この度のコロナウイルスへの心配が第一ですが、今回は二十人となって旅行会社を通して

ました。そのため一ヶ月を切ってからキャンセルすると一人ひとりに二千三百ユーロかかってしまいます。それまでは飛行機キャンセルするだけです。三百ユーロです。

今の状況で一ヶ月後の状況を判断するのは無理ですが、幹事役の三人全員が中止に傾き、また旅行全体を取り仕切りガイド役まで引き受けてくださっている佐藤慧真さんも中止が妥当との意見でした。しかし皆に尋ねたところ、幹事以外は全員旅行実行の希望でした。……団体旅行は骨が折れます。

私の心配はウイルスにかかるよりも、それによって隔離されたりすると、旅行後のびっしりのスケジュールが果たせないことが心配でした。ちなみに予定されていた旅行のあとは四月はじめから七月の第三週まで毎週コースがあつて、空いている週末は一つありません。どのコースも私の担当です。この頃は例年このようにな

っています。文句はありませんが身動きできません。その分九月半ば以降ひと月余り自分のコースは無しにしています。

よって四月の宮崎禅師十三回忌には行くことができません。ちょうど四日間の週末接心が組まれており、毎春この接心には四十人ぐらいの参加者が来ます。十三回忌はわかっていましたが、三月に本山参籠となるので、四月には帰国しないとしてお授戒のこの日もコースを組みました。いまこれをキャンセルすることは出来ません。普門寺にある禅師様の真像とお墓にお詫びしております。

ついでに大したこともない一文ですが「非僧非俗」を添えます。自分の寿塔じゆとうについて元旦に一文草したのですが、こちらはドイツ語でまだ邦訳していません。(※邦訳掲載あり)

ニュースではこの冬米国ではインフルエンザが猛威を振るい、すでに千九百万人がかかり、

うち一万人超が死亡しているそうです。コロナウイルスどころではありません。

今回の涅槃会接心は参加者が少なく八人だけでした。

暖かい日が続き、そのあと時速百三十キロぐらいの大風があつて雪となり、またそれが早々と消えてゆくということを繰り返しています。雨が降らず地下水が極端に少なく、早々農作物や森の木が心配されています。日本はいかがでしょうか。

以上お詫び方々身辺報告いたしました。

御山内つつがなくお過ごしただけますように祈念致します。

合掌

非僧非俗

僧にあらず、俗にあらず。出家ではない、か

といつて在家でもない。

出家でないとは肉食妻帯勝たるべしの在家の生活をしているからである。しかし在家ではないとは肉食妻帯であろうともなからうとも、まず第一に法のために生きる、四弘誓願の菩薩道を生きることがすべてであるからである。よつて在家の生活形態であつても実際には菩薩道としての出家を生きていることになる。

世界中の仏教圏にあつて唯一日本だけがこの形態を取っている。もつともこの頃はこの形態が日本より世界に微々たるものが徐々に広まっている。世界的に認知を受けているとは言いが難いかもされないが、徐々に知られていることは確かであろう。

非僧非俗は大乗仏教の見地からすれば、大智の故に非俗、大悲の故に非僧、とも言えるであろう。

さらに、根本無分別智によりつねに解脱を重ねてゆくが故に非俗であり、後得清浄世間智によつて慈・悲・喜・捨の「四梵住」、布施・愛語・利行・同事の「四摂法」を実践しつつも、証上の修としての和光同塵を生活するが故に非僧である。

これを具体的に生活できるのは日本僧尼であるからである。

しかし非俗の大智による解脱がなければ、非僧の利他行はありえない。これは次のようにも言えるであろう。

第一に戒によつて支えられる定がなければならず、そして定が確立していなければ智は発せられず、よつて解脱という無我ではなく破戒の無慙愧となる。これでは非僧にして苦、非俗にして苦となる。

僧体、俗体に関わらない大乗仏教の菩薩道の真髓は、そしてこれこそ世界に先駆けて日本仏

教がなすべきことであるのだが、大智による大悲の実践である。

これは理屈ではない実地の実践である。また修すべし、論ずべからず、求むべからずでもある。

道元禅師のお歌をお手本にこう言えるであろうか。

愚かなる我は佛にならずとも

衆生を渡しいのち果てなん

壽塔あるいは骸骨の踊り

私は教会の墓地にある生前に立てる墓としての自分の小さな塔の前に立つのが好きだ。といっても石一つなのだが。そこは静かさと平穩が立ち昇り、自分の中でものごとがはつきりとしてまたやすらぎに満ちる。これはおそらく禅で云うところの「髑髏裏の眼睛」の智慧が沸き起こるからであろうか。

人は「髑髏裏の眼睛」をもって、つまり是非を離れ、愛憎から解き放たれて、はじめてやつとすべてを明らかに見ることができると。

人間劇場から出てきてやつと、すべてが愛され祝福されているという、「ただあること」に落ち着く。

生と和み、死と和む。

生を生にまかせ、死を死にまかせ。

とならば一体何が残っているというのか。

「わたしの」髑髏？

とんでもない。

それは昆虫や虫たちが空っぽとなった

目の穴をあちこちと這い回る

遊ぶためのボールだ。

私の塔は盡十方世界宇宙における無の表現に外ならない。なぜなら私の死も無であり、そしてこの無は闘争や喧噪から遠く離れた「平和の苑」における永遠のやすらぎである。

(ドイツ語では墓地はフリートホーフと言うが、ホーフは苑であり、フリートは平和、やすらぎを意味する)。

自分がまだ十六か十七の高校生の時に、あるヴィジョンを体験した。

階段があつて、それは地上から宇宙の何もない空間に向かつて延びていた。満月の夜で、ひ

とつの骸骨がその階段を上がつて行く。その骸骨が自分のほうに首を回した。その目の穴を通して月がたとえようもなく美しく輝いていた。それは生と死を越えた、時空を越えた、冷たい永遠の美しさであつた。

そしてこの骸骨は自分自身であつた。その骸骨が自分を見る、一方自分はその骸骨を見る。骸骨は、私が骸骨の中に自分を見るように、そう私たちが私たちの中に自分を見るように、私の中に骸骨自身を見る。そう私は見るものと見られるものがひとつである自己そのものであつた。

私たちは皆この骸骨つまり無である。踊っている骸骨、眠っている骸骨、歩いてる骸骨、愛し合っている骸骨。つまるところ全世界はかのやすらぎに満たされている、なぜならただかの骸骨が生きているだけなのだから。そうかの禅者、一休や良寛が歌つたように。

私の塔は、すべてが無であり無がすべてである
盡十方世界宇宙の表現である。

愛？

愛とは、人がもはやなにもにも欲望煩悶することなく、思いやりとやすらぎに開かれてあることだ。というの人も人が欲情や欲望で手に入れたりそれをいつまでも持つていられるものなど何もないからだ。

この道理をよく認識してかの放下（穏やかな落ち着き）にあること、そこから欲望ではない真の愛が生まれる、その愛が私たちすべてにやすらぎを与えてくれる。

この愛においてはすべてが一つであり、生もなく死もなく、私もなく他もない。

さあさあみんな私のパゴダに

やっておいで。

良寛の詩にある骸骨のように、

歌おうじゃないか、踊ろうじゃないか。

追記

生前に立てる塔「壽塔」とは坐禪にほかならない。それは「やすらぎの苑」がやはり坐禪そのものであるのと同じである。

一九八五年二月

道成なりぬ陽は春めきて

対岸の草はむ野鹿すがたやさしも

一九八八年十月

円海定光居士より問はれて答へる歌二首

覚行の中身を人間はば

思量にあらざ坐りもてゆく

願行の願の中身を人間はば

自覚覚他の覚行円満

一九八九年二月

ちかひ

もろびとの恩を受けてぞこの日あり

報わざらめやいのちのかぎり

二〇一九年一月二十三日

縁（えにし）

さすたけの君はいかにぞおはします

沫雪積もる庭に降り立つ

来たれ君過ぎ越し幾世いまここに

共にありしを共によるこぶ

君なるはわれに縁のよろづびと

安らぎ祈り幸を願へり

わがいのちよろづの君に捧げんと

誓ひ歩みていまは七十路ぞ

佛の府大悲の御山わが祈り

捨身願行君に幸あれ

《六月二十五日》

この度は育英会募集要項等お送りいただきありがとうございます。ありがとうございました。

日本にあってもコロナ感染で難儀なことと思えますが、当地にあってもいろいろな規制に従わざるを得ず、センターの運営としては容易ではありません。ましてや第二波が来た場合など、社会のあらゆる面で難儀しております。幸い在家参禅者サンガがしっかりとっており、まずは何とか過ごしております。

御地におかれてもご山内ご健勝にてお過ごし
のほど祈念申し上げます。

合掌